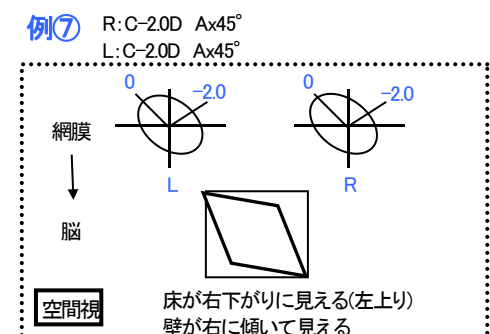
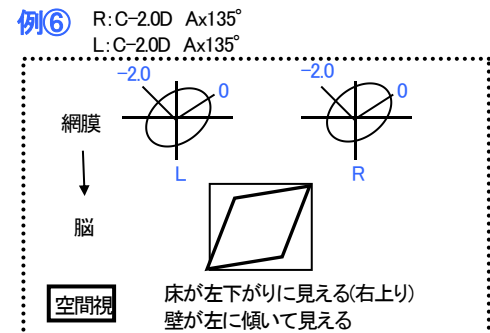
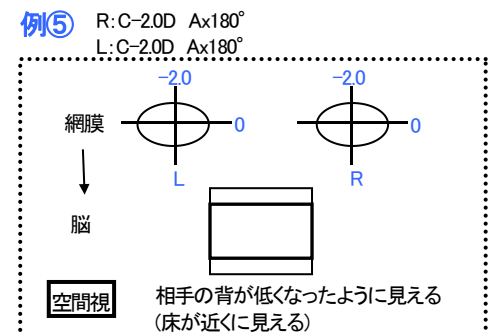
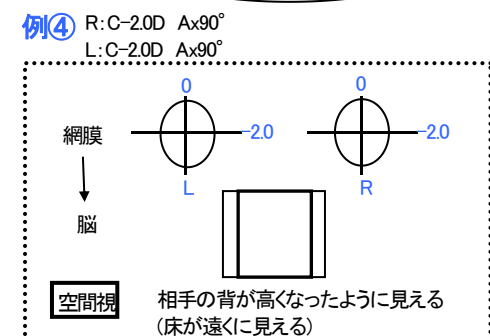


例① $RV=(1.0 \times S-2.50) \rightarrow (0.7 \times S-1.75)$
 $LV=(1.0 \times S-2.25) \rightarrow (0.7 \times S-1.50)$
 $BV=(0.9 \sim 1.0p)$

例② $RV=(0.6 \times JB)$
 $LV=(0.2 \times JB)$
眼鏡度数 $\begin{cases} R:S-1.0D \\ L:S-1.0D \end{cases}$
 $RV=(1.0 \times S-2.50) \rightarrow (0.9 \times S-1.75)$
 $LV=(1.0 \times S-3.00) \rightarrow (0.9 \times S-2.25)$
 $BV=(0.9 \sim 1.0p)$

例③ 完全矯正 $\begin{cases} R:C-2.00D \text{ Ax}90^\circ \\ L:C-2.25D \text{ Ax}85^\circ \end{cases}$
旧眼鏡 $\begin{cases} R:C-1.00D \text{ Ax}85^\circ \\ L:C-1.25D \text{ Ax}100^\circ \end{cases}$
①一挙に完全矯正すると違和感があるので、C-0.25D 減じて $\begin{cases} R:C-1.75D \text{ Ax}90^\circ \\ L:C-2.00D \text{ Ax}85^\circ \end{cases}$
②装用練習で不可ならば、両眼Ax90°にする。
③最終的には、色々試して自覚的に快適なものにする

例④ R:C-2.0D Ax90°
L:C-2.0D Ax90°
C面1Dに加入につき0、4°傾く。
例④～⑨までは被検者から見た
度数なので向かって左が0°



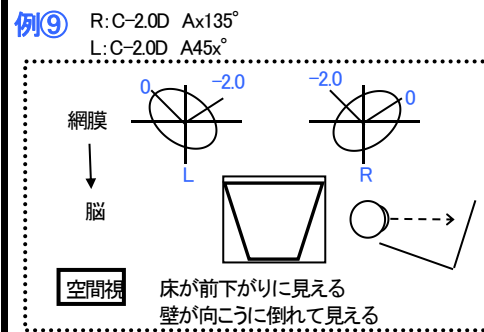
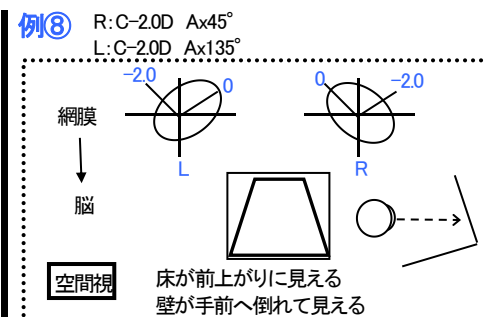
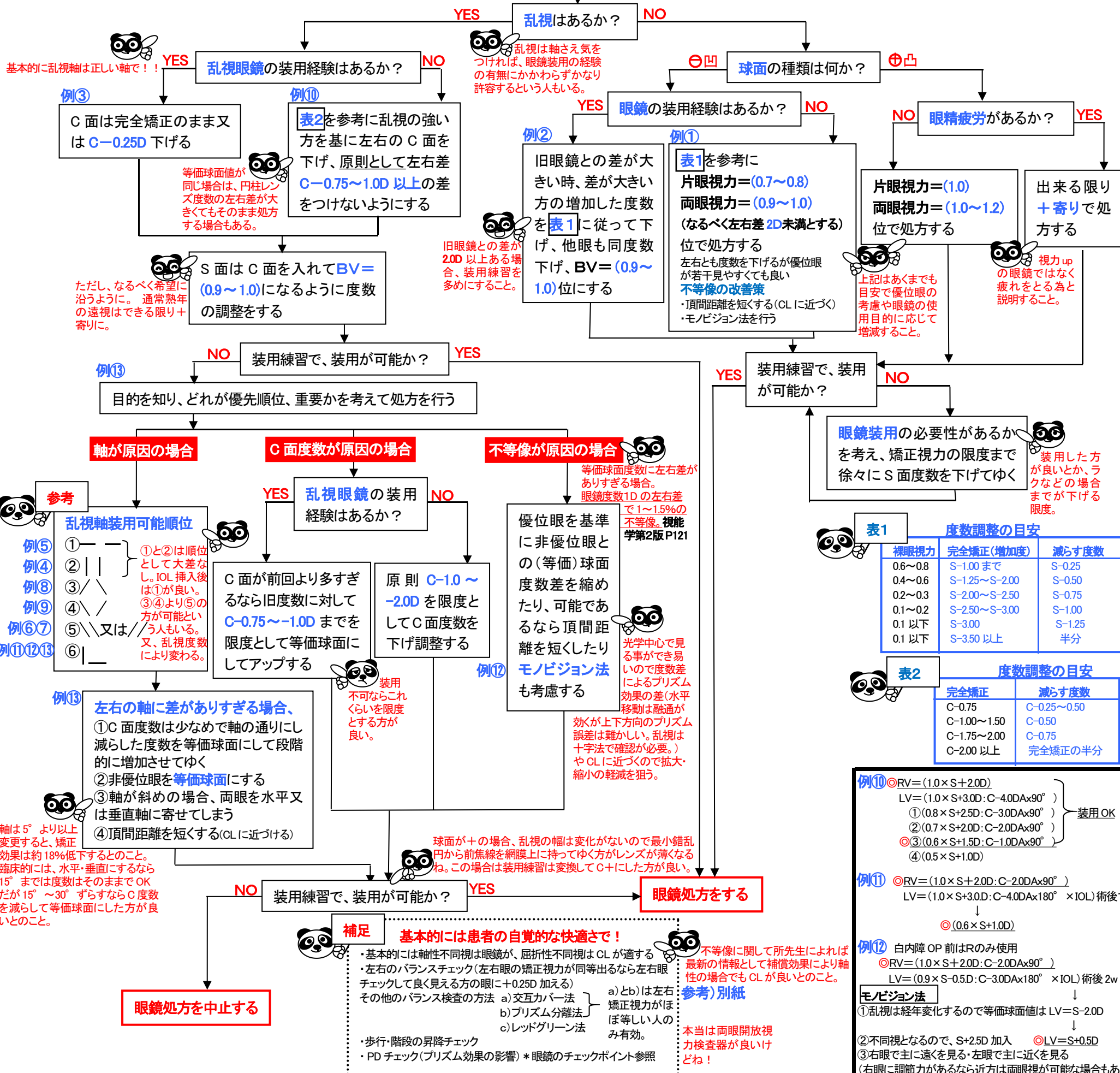
太い枠線で山折り
してね！

準備物 検眼枠・検眼レンズ・視力表

成人の遠用眼鏡度数決定方法例

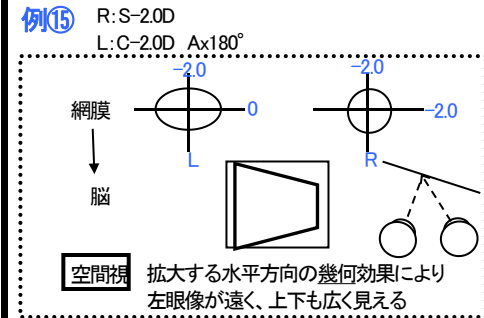
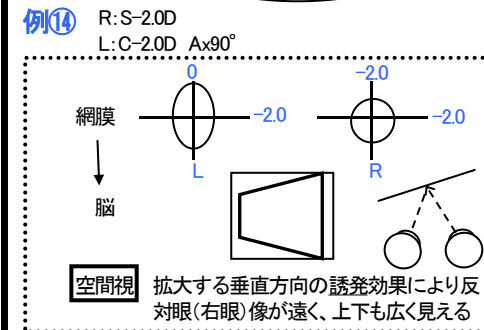
参考)大阪視能訓練士の会の勉強会
日本眼鏡技術専門学校講師 桂 考次郎氏

項目 12. 屈折検査-自覚的屈折検査を参考に屈折矯正検査を行う



その他の例

片眼が水平方向に拡大すると幾何効果により例⑮となり、垂直方向に拡大されると幾何効果を打ち消す誘発効果をもたらす例⑮となる。詳細視能学第2版P117~118参照。



例⑬ $RV=(1.0 \times S+1.0D:C-2.0DAx180^\circ)$
 $LV=(1.0 \times S+1.5D:C-2.0DAx90^\circ)$

①年齢は？(乱視は直一倒へ移行)

②日常視の状態は？(遠近の優位眼・視力差・眼球偏位)

③所持眼鏡は？④眼精疲労は？⑤眼鏡目的は？

12歳まで 出来るだけ完全矯正

12歳~中年まで 段階的にUP

等価球面で低矯正の乱視を左右に入れ

$RV=(0.6 \times S+0.25D:C-0.5DAx180^\circ)$
 $LV=(0.7 \times S+0.75D:C-0.5DAx90^\circ)$

半年後 ↓

$R:S+0.75D:C-1.25DAx180^\circ$
 $L:S+1.25D:C-1.25DAx90^\circ$

半年後 ↓

完全矯正値に

50歳以上 乱視の経年変化(倒乱視化)を考慮して

左眼重視 $\begin{cases} R:S \pm 0.0D \\ L:S+1.5D:C-2.0DAx90^\circ \end{cases}$

若者で運転用 右眼重視で左眼等価球面值

$\begin{cases} R:S+1.0D:C-2.0DAx180^\circ \\ L:S+0.5D \end{cases}$

眼鏡のバランスチェック法



目的

眼鏡処方時、左右の焦点を同位置にし、調節刺激を左右対称にして快適な眼鏡装用にする方法

遠点

参考

YES

矯正視力が左右ほぼ等しいか？

NO

a) 交互カバー法

- ①自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S+0.5D** を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、最高矯正視力よりもやや大きめの視標を見せ、左右眼を交互にカバーする。
- ②1番(右眼)と2番(左眼)ではどちらがはっきり見えるかを尋ね、左右のボケ具合が同等になるまで良く見える方の眼に**プラスレンズ**の度数を加える。
- ③両眼が同等になったら、両眼同時に **0.25D** ずつ最高視力がでるまでプラス度数を減らしてゆく。

この欠点として左右のボケ具合を同時に比較できない。斜位があると視標が動く。

注意！！

基底上方に装用した眼の視標は下に見えるよ！この場合、上下の視標を見ようとHeringが働き眼が上下に動く。視標が同時に見える場合はFで見ていないことになると思うなあ。

しかし、プラスレンズを多く加え過ぎないこと。時には良く見えない方の眼にマイナスレンズが必要な場合もある。

b) プリズム分離法



パンダの考えとして、この検査を行うのはかなり難しいと思うけど・・・。

- ①自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S+0.5D** を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、ボケた状態でも読み取ることが出来る程度の大きさの1行の文字視標を見せ、読ませる。(R・G法で行う場合もあり)
- ②左右の眼前に同量の**プリズム**、一般的には一方に**4△基底上方**、他方に**4△基底下方**を加え、視標がダブって見えているか確認する。
- ③被検者に上下どちらの視標がハッキリと見えるかを尋ね、両眼が同等に見えるまで、良く見える方の眼に**+0.25D** 位ずつ加えてゆく。
- ④両眼が同等に見えたなら、片眼ずつ交代に**+0.25D** 加えて見え方に差が出るかを見て、バランスの最終確認をする。どうしても視力が同等にならなければ、差の少ない方を選ぶ。
- ⑤**プリズム**をはずし、視標が1つに見えるかを確認し、**-**の場合は最弱度数の最高視力、**+**の場合は最強度数の最高視力が得られるまで、両眼同時に **0.25D** ずつプラス度数を減らしてゆく。

理論上、近視よりとなるので、赤がはっきり見えるはずだね。

c) レッドグリーン法

- ①自覚的屈折検査の結果に両眼それぞれ約 **S+0.5D~+0.75D** 程度を加えて(乱視はそのまま)雲霧を行い、**赤地**の視標がはっきり見えるかを確認する。
- ②片眼を遮閉し、**赤と緑**のどちらがはっきり見えるかを尋ね、**赤と緑地**が同じ程度に見えると答えるまで **0.25D** ずつプラス度数を減らしてゆくか、又はマイナス度数を加えてゆく。
- ③他眼も同様に行なう。
- ④再度、最初に行なった眼にもどり、**赤と緑地**が同じかを確認する。
- ⑤両眼にし、左右同時に球面調整を行い、**+**の場合は最高度数の最高視力を、**-**の場合は最弱度の最高視力を得る。

その値から眼鏡装用可能度数まで左右それぞれ同度数下げる